

立命館大学大学院
2018年度実施 入学試験

博士課程前期課程

文学研究科

人文学専攻・日本史学専修

※2019年9月入学 入学試験は、筆記試験の実施がないため掲載していません

入試方式	実施月	コース	専門科目 (英語による問題を含む)		外国語(英語)	
			ページ	備考	ページ	備考
一般入学試験	9月	研究一貫	P.1～		P.13～	
	2月		P.7～		P.15～	
	9月	高度専門	P.1～			
	2月		P.7～			
社会人入学試験	9月	研究一貫	×			
	2月		×			
	9月	高度専門				
	2月					
外国人留学生入学試験	9月	研究一貫				
	2月					
	9月	高度専門				
	2月					
学内進学入学試験	9月	研究一貫				
	9月	高度専門				
学内進学入学試験 (大学院進学プログラム履修生対象)	2月	研究一貫				
	2月	高度専門				
APU特別受入入学試験	9月	研究一貫				
	9月	高度専門				

立命館大学大学院
2018年度実施 入学試験

博士課程後期課程

文学研究科

人文学専攻・日本史学専修

※2019年9月入学 入学試験は、筆記試験の実施がないため掲載していません

入試方式	実施月	科目	ページ	備考
一般入学試験	2月	英語	P.17～	
外国人留学生入学試験	9月			
	2月			
学内進学入学試験	2月			

2019年度 立命館大学大学院文学研究科入学試験問題

2018年9月15日

博士課程前期課程 人文学専攻
日本史学専修

「専門科目」

●受験上の注意

- ① 試験中、冊子をばらしても構わないが、終了後再び綴じて提出すること
(ホッチキスを貸与します)
- ② 全ての用紙に受験番号、氏名等を記入し、提出すること

●試験中の持込許可物件について

- ① 筆記用具、受験票、時計以外の持込は認めない

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名 人文学専攻 (日本史学専修)	課程 前期課程	科目 専門科目	コース <input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度専門	受験番号	氏 名
-----------------------------	------------	------------	---	------	-----

問一 次の四題のうちから一題を選んで論述せよ。

- (一) 七世紀から九世紀にかけての朝廷による東北経営の過程について論述せよ。
- (二) 日本中世の国際交流の特質について、具体的な事例を挙げながら論述せよ。
- (三) 日本近世には、さまざまな情報ネットワークが形成されたことが最近の研究では注目されている。情報ネットワークをキーワードにして、日本近世社会の特質・構造などについて自由に論述せよ。
- (四) 日本近代史上の人物を一名取り上げ、その人物が先行研究でどのように語られているのか、それに対してどのような新たな研究が可能であるのか、具体的に論述せよ。

問二 次の七項目の中から四項目を選び、その語句をそれぞれ三～五行で説明せよ。

- (一) 山作司
- (二) 半国守護
- (三) 嘉靖の大倭寇
- (四) 『寛政重修諸家譜』
- (五) 木村兼葭堂
- (六) 榎本武揚
- (七) 自治体警察

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名 人文学専攻 (日本史学専修)	課程 前期課程	科目 専門科目	コース <input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度専門	受験番号	氏 名
-----------------------------	------------	------------	---	------	-----

問三 次の問題(一)～(四)のうちから、二つ選んで解答せよ。

(一) 次の史料文を書き下し文に改め、かつ現代語訳せよ。

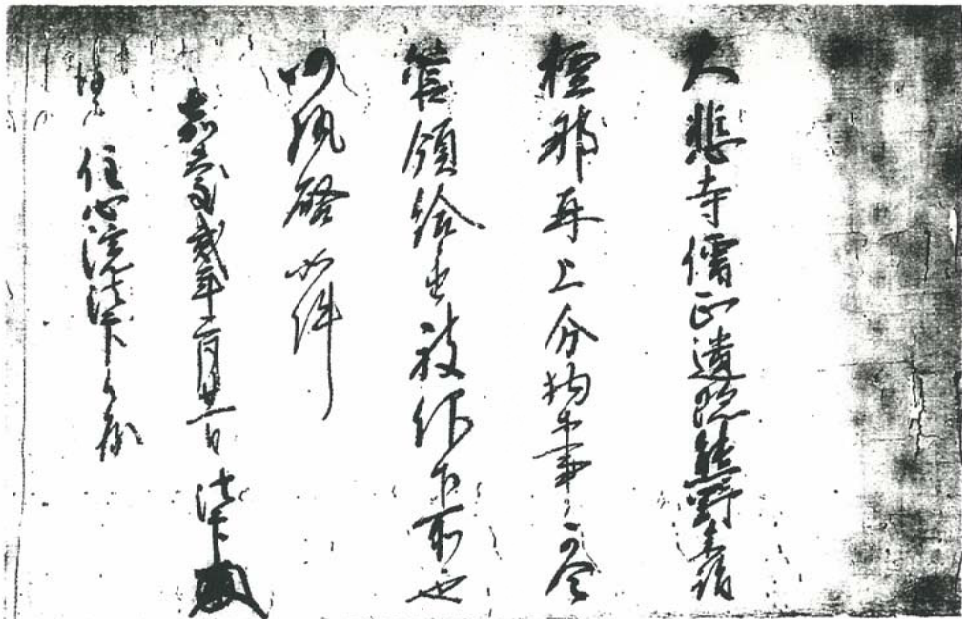
勅大同之初令畿内講師專預講説令演真諦其諸寺雜事并補三綱等暫預僧綱但国分寺者国司講師相共檢校者自今以後部内諸寺宜令講師永加檢校其国分二寺国司亦相共檢其造寺用度者講師別亦勘録毎年申送於僧綱遷替之日令依旧例責其解由諸国亦宜准之

出典…黒板伸夫、森田悌編『日本後紀』，集英社，2003年，p.602. (ISBN:4-08-197005-X)
権利者の許可を得て掲載。

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名 人文学専攻 (日本史学専修)	課程 前期課程	科目 専門科目	コース <input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度専門	受験番号	氏 名
-----------------------------	------------	------------	---	------	-----

(二) 次の史料を翻刻して、句読点と返り点を付け、読み下し文にせよ。



出典：首藤善樹，坂口太郎，青谷美羽編『住心院文書』，思文閣出版，2014年，肩写真，
(ISBN:978-4-7842-1744-1)
権利者の許可を得て掲載。

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏 名
人文学専攻 (日本史学専修)	前期課程	専門科目	<input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度専門		

(三) 次の史料を全文読み下し文にせよ。 出典 『藤原惺窩文集卷之九』(舟中規約)。

一、凡回易之事者。通有無而以利人己也。非損人而益己矣。共利者。雖小還大也。不共利者。雖大還小也。所謂利者。義之嘉会也。故曰貪賈五之。廉賈三之。思焉一、異域之於我国。風俗言語雖異。其天賦之理。未嘗不同。忘其同。怪其異。莫少欺詐慢罵。彼且雖不知之。我豈不知之哉。信及豚魚。機見海鷗。惟天不容偽。欽不可辱我国俗。若見他仁人君子。則如父師敬之。以問其国之禁諱。而從其国之風教

一、上堪下輿之間。民胞物与。一視同仁。況同国人乎哉。況同舟人乎哉。有患難疾病凍餒。則同救焉。莫欲苟独脱

一、狂瀾怒濤雖險也。還不若人欲之溺人。人欲雖多。不若酒色之尤溺人。到处同道者。相共匡正而誠之。古人云。畏途在衽席飲食之間。其然也。豈可不慎哉

一、瑣碎之事。記於別錄。日夜置座右以鑑焉

出典…石田一良 金谷治校注『藤原惺窩…林羅山』、岩波書店、1980年、p.106. (日本思想大系 28).
権利者の許可を得て掲載。

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名 人文学専攻 (日本史学専修)	課程 前期課程	科目 専門科目	コース <input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度専門	受験番号	氏名
-----------------------------	------------	------------	---	------	----

(四) 次の史料を読み、後の問いに答えよ。

朕明治十四年十月十二日の詔旨を履み、立憲の政体を大成するの規模は固より一定する所ありと雖、其経営措画に至ては各国の政治を斟酌して、以て采択に備るの要用なるか為に今①爾をして②歐洲立憲の各国に至り、其政府又は碩学の士と相接し其組織及び実際の情形に至るまで観察して余蘊無からしめんとす。茲に爾を以て特派理事の任に当らしめ、爾が万里の行を勞とせずして此重任を負担し帰朝するを期す

明治十五年三月三日 奉 勅 太政大臣從一位勲一等 三条実美

一、歐洲各立憲君治国の憲法に就き、其淵源を尋ね、其沿革を考へ、其現行の実況を視、利害得失の在る所を研究すべき事。

一、皇室の諸特権の事。

一、皇室並皇族財産の事。

一、内閣の組織並立法行政司法及外交の事に関する職権の事。

一、内閣の責任法の事。

一、内閣大臣と上下両院との間に存する諸關係の事。

一、内閣の事務取扱手続の事。

一、上院及下院組織の事。

一、貴族の制度特権の事。

一、上院及下院の権限並事務取扱手続の事。

一、上院及下院に関する皇室の特権の事。

(以下省略)

(1) 傍線部①の「爾(なんじ)」とは誰のことか。

(2) 傍線部②をうけて、「爾」は具体的にどの国に出かけ、どのような人物と会ったのか。

(3) この調査団について知ることを述べよ。

出典…『立憲政体調査ニツキ特派理事歐洲派遣ノ勅書』 明治十五年三月三日、
(伊藤博文関係文書 書類の部 209)、国立国会図書館デジタルコレクションから転載
<http://www.ndl.go.jp/modern/img_t/025/025-001tx.html>。
権利者の許可を得て掲載。

2019年度 立命館大学大学院文学研究科入学試験問題

2019年2月16日

博士課程前期課程 人文学専攻
日本史学専修

「専門科目」

●受験上の注意

- ① 試験中、冊子をばらしても構わないが、終了後再び綴じて提出すること
(ホッチキスを貸与します)
- ② 全ての用紙に受験番号、氏名等を記入し、提出すること

●試験中の持込許可物件について

- ① 筆記用具、受験票、時計以外の持込は認めない

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名 人文学専攻 (日本史学専修)	課程 前期課程	科目 専門科目	コース <input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度専門	受験番号	氏 名
-----------------------------	------------	------------	---	------	-----

一、次の問い①～④のうち一つを選択し、答えよ。

- ① 東アジアの情勢をふまえ、推古朝の政策とその史的意義を論述せよ。
- ② 中近世移行期の権力とされる織豊政権は、どのような点で中世的なのか。中世とは何か、を定義しつつ、自由に論ぜよ。
- ③ 日本の幕末維新は何年に始まり、何年に終わったと考えられるか。またそう考えられる理由は何か。論述せよ。
- ④ 日本近現代(明治維新～現代)の歴史を理解、説明するのに重要と思われる概念を一つ選び、①なぜそう思うのか、②その概念についての研究史、③その概念を含む問題点、について自由に論ぜよ。
なお、概念など不要、有害と考えるのであれば、例をあげてその理由を論じてよい。

二、次の語句①～⑥のうち四つを選んで、説明せよ。

- ① 八幡神
- ② 源義家
- ③ 御料所
- ④ 慶安の御触書
- ⑤ 民法典論争
- ⑥ 華北分離工作

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名 人文学専攻 (日本史学専修)	課程 前期課程	科目 専門科目	コース <input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度専門	受験番号	氏 名
-----------------------------	------------	------------	---	------	-----

三、次の史料問題(一)～(四)のうち、二つを選んで答えよ。

(一) 次の史料を書き下し文に改め、かつ解釈せよ。

先是去天平勝宝三年九月太政官符偁豊富百姓出举钱财贫乏之民宅地为质至於追徵自償其质既失本業迸散他国自今以後皆悉禁止若有约契雖至償期猶任住居令漸酬償至是勅先有禁断曾未懲革而今京内諸寺貪求利潤以宅取质廻利為本非只綱維越法抑亦官司阿容何其為吏之道輒違王憲出塵之輩更結俗網宜其雖經多歲勿過一倍如有犯者科違勅罪官人解其見任財貨没官

出典：黑板勝美『続日本紀後篇』吉川弘文館，一九七七年，p.496.

文学研究科入学試験答案用紙

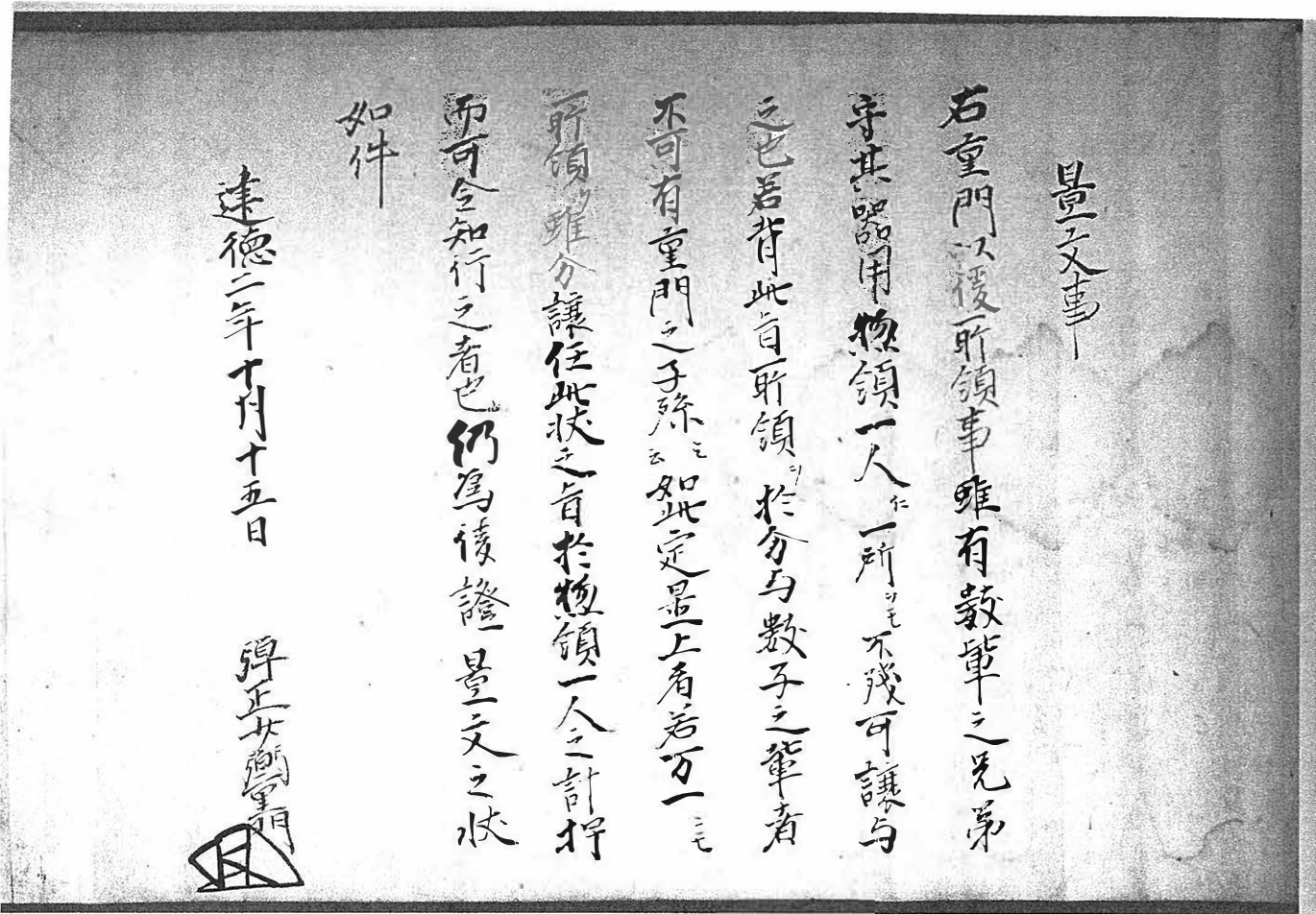
専攻・専修名 人文学専攻 (日本史学専修)	課程 前期課程	科目 専門科目	コース <input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度専門	受験番号	氏 名
-----------------------------	------------	------------	---	------	-----

(二) 次に示す図版(古文書)のコピーに関する(1)～(2)の設問に答えよ。

(1) この古文書の積文を作れ。改行は原文どおりに行い、返り点・読点を付け、異体字・正字(旧漢字)は対応する常用漢字(新字)があれば、その類に改めよ。

(2) この古文書から、中世における武士の相続についてどのようなことが読み取れるか。古文書中の文言を用いながら説明せよ。その際、変化や背景についても詳しく述べること。なお、文書の年代は西暦一三七二年である。

出典：国立歴史民俗博物館編『日本の中世文書：機能と形と図解比較(図録)』二〇一八年、p.93より
『入本院家文書 定心大庵集ヨリ重利判定 拾五通 十四番 渋谷重門重二』(東京大学史料編纂所蔵)
権利者の許可を得て掲載



文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名 人文学専攻 (日本史学専修)	課程 前期課程	科目 専門科目	コース <input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度専門	受験番号	氏 名
-----------------------------	------------	------------	---	------	-----

(三) 次の史料を読み、後の問いに答えよ。

(前略) 謹て古今の時勢を通考するに、天下の民は速に相親む者にして、其勢は人力のよく防ぐ所にあらず、蒸気船を創製せしよりこのかた、各国相距ること遠きも、猶近きに異ならず、如斯互に好みを通ずるの時に当り、独り国を鎖して万国と相親まざるは、人の好みする所にあらず、貴国歴代の法に異国人と交を結ぶ事を厳禁し給ひしは、欧羅巴洲にて遍く知る処なり、老子曰、賢者位に在れば、特によく治平を保護す、故に古法を堅く遵守して、反て乱を醸さんとせば、其禁を弛むるは賢者の常経のみ、これ殿下に丁寧に忠告する所なり、今貴国の幸福なる地にして、兵乱の為に荒廢せざらしめんと欲せば、異国人を嚴禁するの法を弛め給ふべし、これ素より誠意に出る所にして、我國の利を謀るにはあらず、夫れ平和は懇に好みを通ずるに在り、懇に好みを通ずるは、交易に在り、冀くは叡知を以て、熟計し給はん事を

- ① 全文の要旨を簡条書きで整理せよ。
- ② この文章は、一八四四年に当時の徳川將軍家に対して、とある国の元首から届けられたものである。その国名と元首名を答えよ。
- ③ この史料について、知るところを述べよ。

出典：児玉幸多編『史料による日本の歩み 近代編』、吉川弘文館、
一九九一年、p.9 (ISBN:978-4642010092) 権利者の許可を得て掲載。

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名 人文学専攻 (日本史学専修)	課程 前期課程	科目 専門科目	コース <input type="checkbox"/> 研究一翼 <input type="checkbox"/> 高度専門	受験番号	氏 名
-----------------------------	------------	------------	---	------	-----

(四) 次の史料は日本近代史の分野でよく知られた論説の一部である。①～④の問いに答えよ。

- ① この論説の筆者は誰か。
 ② A に入る語句を漢字四文字で答えよ。
 ③ この論説が掲載された雑誌は何か。次の内から一つ選び、番号で答えよ。
 (1) 『中央公論』 (2) 『国民之友』
 (3) 『日本及日本人』 (4) 『新青年』
 ④ この史料の時代背景を三～五行程度で説明せよ。

A

の平和主義を排す

戦後の世界に民主主義人道主義の思想が益々旺盛となるべきは最早否定すべからざる事実といふべく、我国亦世界の中に国する以上此思想の影響を免かるゝ能はざるは当然の事理に属す。

(中略)

吾人を以て之を見る、欧洲戦乱は已成の強国と未成の強国との争なり、現状維持を便利とする国と現状破壊を便利とする国との争なり。現状維持を便利とする国は平和を叫び、現状破壊を便利とする国は戦争を唱ふ。平和主義なる故に必しも正義人道に叶ふに非ず軍国主義なる故に必しも正義人道に反するに非ず。要は只其現状なるもの、如何にあり。もし戦前の現状にして正義人道に合する最善の狀態なりしならば、之を打破せんとするものは正義人道の敵なるべく、もし其現状にして正義人道に叶はざりしならば、此現状を打破したるもの必しも正義人道の敵に非ざると同時に、此現状を維持せんとせし平和主義の国必しも正義人道の味方として誇るの資格なし。而して欧洲戦前の現状なるものを英米より見れば或は最善の狀態なりしならんも、公平に第三者として正義人道の上より之を見れば決して最善の狀態と認むるを得ず。英国の如き仏国の如き其殖民史の示す如く、早く已に世界の劣等文明地方を占領して之を殖民地となし、其利益を独占して憚らざりしが故に、独り独逸とのみ言はず、凡ての後進国は獲得すべき土地なく膨張發展すべき余地を見出す能はざる狀態にありしなり。かくの如き狀態は實に人類機会均等の原則に悖り、各国民の平等生存権を脅かすものにして正義人道に背反するの甚しきものなり。独逸が此狀態を打破せんとしたるは誠に正当の要求と言ふべく、只彼が採りし手段の中正穩健を欠き、武力本位の軍国主義なりしが故に一世の指弾を受けたりと雖、吾人は彼が事茲に至らざるを得ざりし境遇に対しては特に日本人として深厚の同情なきを得ず。

(下略)

2019年度 立命館大学大学院文学研究科入学試験問題

2018年9月15日

博士課程前期課程 人文学専攻
日本史学専修

「外国語」(英語)

●受験上の注意

- ① 試験中、冊子をばらしても構わないが、終了後再び綴じて提出すること
(ホッチキスを貸与します)
- ② 全ての用紙に受験番号、氏名等を記入し、提出すること

●試験中の持込許可物件について

- ① 筆記用具、受験票、時計以外の持込は認めない

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏 名
人文学専攻 (日本史学専修)	前期課程	外国語 (英語)	研究一貫		

次の英文を和訳せよ。

In *Studies in the Intellectual History of Tokugawa Japan*, Maruyama Masao brought up the central problem of historical transformation from the Japanese ethnos (*minzoku*) to the Japanese nation (*kokumin*), and his argument in this anthology is guided by an inquiry into how to establish the political technologies necessary to manufacture the nation equipped with "political national consciousness," which would identify with a national community spontaneously from within, out of the awareness of their common characteristics (*bunka-teki ittaisei*). "Before a people can become a nation, they must actively desire to belong to a common community and participate in common institutions, or at least consider such a situation to be desirable." Here Maruyama poses the main theme of his inquiry, which incidentally is also an analysis of the mechanism in which the desire for Japanese thought is produced in the history of Japanese thought. It is worth noting, furthermore, that the nation that is to come into being through identification with a national community is already given its unity as a community of national culture, as a community whose cultural identity has been achieved. And the being of the nation is defined as follows: "In other words, we can say that a nation exists only if the members of a given group of men are aware of the common characteristics that they share with each other and that distinguish them from other nations as a special nation and possess some desire to preserve and foster this unity." As a consequence, the history of Japanese thought is narrated as the development of the thought of the Japanese ethnos (whose mode of being, to use Tanabe Hajime's terminology, is that of a *substratum*, *kitai*) into that of the Japanese nation (whose mode of being is that of *subject*, *shutai*), while the Japanese as the subject of thought has to be assumed to have been enduring throughout the development. And Maruyama argues that national consciousness emerges simultaneously as the comparative consciousness emerges that contrasts the Japanese with other nations. In the end, his critical attention focuses both on how they have failed to accomplish the "decisionistic" gathering of the national consciousness, of the consciousness of political communality, and on what the historical conditions for this failure are.

[出典]

Copyright 1997 by the Regents of the University of Minnesota Sakai, N. (1997).
Translation and subjectivity: On "Japan" and Cultural Nationalism. Minneapolis:
University of Minnesota Press, pp.64-65.
Reproduced with the permission of the University of Minnesota Press.

2019年度 立命館大学大学院文学研究科入学試験問題

2019年2月16日

博士課程前期課程 人文学専攻
日本史学専修

「外国語」(英語)

●受験上の注意

- ① 試験中、冊子をばらしても構わないが、終了後再び綴じて提出すること
(ホッチキスを貸与します)
- ② 全ての用紙に受験番号、氏名等を記入し、提出すること

●試験中の持込許可物件について

- ① 筆記用具、受験票、時計以外の持込は認めない

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏 名
人文学専攻 (日本史学専修)	前期課程	外国語 (英語)	研究一貫		

次の英文を和訳せよ。

We need first to establish a framework of reference to discuss "Court" and "Bakufu." It is customary to view Kamakura Japan as a period of bipolar power centers in Kyoto and Kamakura—courtier government (*kuge seiken*) and warrior government (*buke seiken*). The dualism seems inescapable when Kamakura is compared with the Muromachi period, when *kuge seiken* finally disappeared. By contrast, Kamakura Japan appears to be a battleground for unitary control between the two competing power centers. In fact, the emergence of the two poles has caused some scholars to question the existence of a Japanese state during this period. It has led others to develop a state theory of multiple private elements (*kemmon*) competing mutually for power. In my own view, what happened during the Kamakura period is a classic case of "promotion," in which an institution designed to be system-serving (the Bakufu as an organ of state) "promoted" itself to a self-serving role (the Bakufu as national government). In the

late Heian period, in a similar manner, the *insei*, a special-purpose institution designed to organize the interests of the imperial house, was raised to the level of a general-purpose institution, in effect becoming the major governmental organ of state. In many ways, the Kamakura power struggle was a contest between these two newly promoted institutions—the *insei* and the Bakufu.

During the Kamakura period, the promotion of the Bakufu was an uneven process. The advances and retreats were due to political difficulties within both the Court and Bakufu as well as between the two. Moreover, the promotion of the Bakufu was not totally the result of its own attempts at aggrandizement. On the contrary, Bakufu leaders accepted the concept of cooperation with the Court and exercised considerable restraint. Kamakura was often beseeched to exercise authority it did not seek, and it frequently refused. Likewise, the Bakufu on many occasions chose not to invade areas of Court authority when it had the opportunity. The Kyoto-Kamakura relationship was basically symbiotic, a "joint polity," as we will see in the pages that follow.

【出典】

Excerpted from: Court and Bakufu in Japan: Essays in Kamakura History

Mass, Jeffrey (editor) Copyright (c)1982 by Jeffrey P. Mass

All rights reserved. With the permission of Stanford University Press, www.sup.org

2019年度 立命館大学大学院文学研究科入学試験問題

2019年2月16日

博士課程後期課程 人文学専攻
日本史学専修

「外国語」(英語)

●受験上の注意

- ① 試験中、冊子をばらしても構わないが、終了後再び綴じて提出すること
(ホッチキスを貸与します)
- ② 全ての用紙に受験番号、氏名等を記入し、提出すること

●試験中の持込許可物件について

- ① 筆記用具、受験票、時計以外の持込は認めない

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	受験番号	氏 名
人文学専攻 (日本史学専修)	後期課程	外国語 (英語)		

次の英文を和訳せよ。

The new constitution's most radical imposition was Article 9, which proclaimed that "the Japanese people forever renounce war as a sovereign right of the nation and the threat or use of force as a means of settling international disputes." Article 9 has been a point of contention ever since its establishment, not least because even the Occupation authorities swiftly came to regret it. A Japan without a military was a Japan that relied upon the US to defend it—a handy excuse for bases on Japanese soil, but an easy target for isolationist campaigners in Washington. Meanwhile, the proclamation of the People's Republic of China in 1949, and the outbreak of the Korean War in 1950, turned Japan from a supposedly pacifist nation into America's "unsinkable aircraft carrier" in the Pacific. The Occupation forces had originally arrived with the intention of demilitarizing and possibly even deindustrializing Japan in order to remove the forces that had motivated its imperial expansion. It was hence a matter of luck for the Japanese that the concerns of the Cold War caused their American masters to reconsider and retrench partway through the Occupation. The encouragement of Japan's left wing was no longer regarded as a welcome element of democracy, but as a socialist agitation that needed to be contained. The breakup of the zaibatsu was curtailed or suspended, and factories slated for decommissioning were instead retooled for new purposes. As for the renunciation of war, while the Occupation was still rolling, the authorities found enough of a loophole to inaugurate a 75,000-man-strong "National Police Reserve" that would eventually grow into a Self-Defense Force—which, to outside observers, looks suspiciously like an army, navy, and air force. Its existence was justified by the claim that it was intended *solely* for self-defense—jets, for example, lacked the long-range fuel tanks required for attacking foreign countries—and hence did not contravene Article 9's renunciation of military aggression. In decades to come, Article 9 would invite new complaints from abroad—that Japan was enjoying the fruits of other nations' military protection without providing substantial contribution of its own. This would become particularly notable in the 1990s, when resource-poor Japan was accused of being a prime beneficiary of the Gulf War despite fielding no troops in it.

【出典】

Clements, J. (2017). *Brief History of Japan*. Tuttle Publishing, pp.225-226.
Reproduced with permission of the publisher.